



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	フィンランドの死者のカルシッコ : 風習の形成、変化、現在
Author(s)	田中, 佑実; Tanaka, Yumi
Citation	北方人文研究, 15, 43-61
Issue Date	2022-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84606
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_04_Tanaka.pdf



フィンランドの死者のカルシッコ —風習の形成、変化、現在—

田中佑実

(北海道大学大学院文学研究科)

要旨

フィンランドのサヴォ地方では、かつて死者のカルシッコと呼ばれる樹木が知られていた。死者のカルシッコは、家から墓場へと通じる道の途中に立つ木々の中から選ばれ、枝が切り落とされたり、死者のイニシャルや生没年が幹に刻まれることで作られた。それらの樹木は死者の帰還を防ぐものとして、17世紀以降、主にルーテル派教会に属するサヴォ地方の人々の間で機能していた。死者のカルシッコは人々の生活を守り、畏敬の念を集める対象であったが、19世紀後半以降の近代化によって、その認識は塗り替えられていった。

これまでの死者のカルシッコに関する先行研究では、その形式や起源、機能、分布、ヨーロッパやバルト地域との関係等について考察がなされてきた。死者のカルシッコに関する研究は1880年代から1990年代まで連続と行われており、起源や機能、死者と生者のつながりに関する議論が中心である。しかし2018年以降、筆者が死者のカルシッコの風習を続ける家族のもとで行ってきたフィールドワークにおいて、風習に関して家族の口から頻繁に語られたことは、死者についてのものよりも、樹木と彼ら自身についてであった。

本論文では、まず死者のカルシッコを取り扱う土台として、フィンランドの宗教的文化的歴史背景を紹介し、先行研究をもとに死者のカルシッコの形成や変化について記述する。その後フィールドワークの情報を参照しながら、衰退の一途を辿る風習の現状を示し、死者のカルシッコの木と、ある家族の繋がりについて「エラマ *elämä*」という言葉に着目し考察する。

はじめに

約200年前のフィンランドとその近隣地域には、道端に印が刻まれた樹木が立っていた。樹木には死者のイニシャルや生没年を示した数字、時に十字架が刻まれていた。このような印はカルシッコ (*Karsikko*) と呼ばれ、この印が刻まれた樹木も同じようにカルシッコと呼ばれたり、死者のカルシッコ (*Vainajan karsikko*)、カルシッコの木 (*Karsikkopuu*)、その樹木の種類にならってカルシッコの松 (*Karsikkopetäjä*) などと呼ばれた¹⁾。カルシッコの語源はフィンランド語の動詞“*karsia*”で「枝を切り落とす」という意味を持つ (*Vilkuna* 1992: 16)。詳しくは後述するが、これはもともとカルシッコを作る方法が樹木の枝を切り落とすことであったことに由来している。また樹木に印を刻みつける形式では、ときに十字架を印すことから、地域によっては十字架の木 (*Ristipuu*)²⁾

1) 本論文では、死者のカルシッコと正式名称を使う場合もあれば、カルシッコとだけ記す場合がある。フィールドワーク先の家族の呼び方に倣い、カルシッコと表記する場合が大半だが、そのほとんどの場合死者のカルシッコを意味している。

2) 十字架の木は、十字架の印のみを木に刻む形式として呼ばれることが多い。十字架の木は死者のカル

とも呼ばれており、カルシッコの場合と同じように樹木の種類にならって十字架の松 (Ristipetäjä) などと呼ばれていた。カルシッコは、死後家に帰ってこようとする死者を墓場に返す機能から、生者と死者の領域を分けると同時に結ぶ境界であり、人々に畏怖の念を抱かせる存在であった。その樹木を伐った者には不幸が降りかかり、病気になったという事例がアーカイブ上で多く語られていることから、カルシッコの木は単なるモノとしての樹木ではなかったことが窺える。しかし19世紀後半以降、林業がフィンランドの経済基盤になるにつれて、カルシッコの木に製材所の刃が襲いかかった。この時既に、カルシッコの風習はほとんど行われなくなっていた。時代の流れの中でカルシッコの木は資材として眺められ、風習は忘れ去られていったのだ。

これまでのカルシッコに関する研究は、その形式や起源、機能、分布、ヨーロッパとバルト地域との関係など、様々に考察がなされてきた (Aspelin 1882; Hornborg 1886; Krohn 1894; Waronen 1898; Kaarle Krohn 1898; Homberg 1924; Kempainen 1967; Vahtola 1980; Pentikäinen 1990; Vilkuna 1992; Sarmela 2009)。特に起源を巡る議論は時代を超えて研究者の注目を集めており、1990年代のVilkuna (1992) による議論によって、ようやく有力な説が整えられた。死者のカルシッコ研究では、Vilkuna による“Suomalaiset Vainajien Karsikot ja Ristipuut (『フィンランドの死者のカルシッコと十字架の木』)” (1992) が、これまでの死者のカルシッコに関する知識を体系的に整理したものととして金字塔的存在となっている。本論文も彼の論に依拠するところが大きい。しかし Vilkuna (1992) を含め、これまでの死者のカルシッコを巡る議論では、死者と生者の関係や生者間の社会的問題は取り上げられても、樹木と人々の関係について真正面から議論しているものは少ない。写真家のKovalainen と Seppo の共著“PUIDEN KANSA (『木の民』)” (1997) はカルシッコを受け継いできた人々の生の声が聴けるものとして人類学的観点からも興味深く、樹木と人間の繋がりに注目したものとして本研究の目的と軌を一にしているが、研究というよりはカルシッコの紹介に留まっている。死者のカルシッコの風習は人々の生活の文脈から切り出して検討されることが多く、死者と生者の繋がりは頻繁に取り上げられても、風習の担い手である人々の生活の中でカルシッコの木がどのような存在として捉えられているかについて検討されることは少なかった。その理由は、これまでカルシッコの風習がミクロ的な人々の生活や社会の流れの中で捉えられてこず、樹木自体が主体を奪われたモノとして考えられてきたためだと推測する。人々の生活の中でカルシッコの風習を眺めるためには、フィールドワークの手法を用い、自ら人々と過ごす中で樹木と人々を中心とする繋がりを幅広く捉える必要がある。

本論文では、カルシッコの風習を現代でも続けている家族のもとで行ったフィールドワークの情報をもとに、カルシッコの木と家族の関係について考察する。このことを理解するための基本的知識として、第1章ではフィンランドの宗教的文化的歴史背景を紹介し、第2章ではこれまでの先行研究をもとに死者のカルシッコの形成や変化について記述する。第3章でフィールドワークの情報を提示することで風習の現状を記述し、第4章でフィールドワークでの情報をもとに、現代のカルシッコの風習における樹木と人々の繋がりについて「エラマ elämä」という言葉に着目し考察したい。

シッコの風習と同じ時期にカレリア地峡を含むフィンランド東南部やバルト地域で作られ、エストニアの一部の地域では今日でも続けられている風習である。死者のカルシッコと十字架の木の機能や分布についての比較は Vilkuna (1992) を参照。

1. フィンランドの宗教・文化的な歴史の概観

歴史を遡ると、今日のフィンランドにあたる土地に住む人々は狩猟採集を中心とした生活を送っていた。コミュニティの生活は秋や冬に村に集まり、春に鮭やシカをとるために狩猟の旅をして動き回るというサイクルの中で営まれ (Sarmela 2009: 27)、人々の生活は自然のリズムと連動していた。狩猟採集文化において自然は人間によって独占されるものではなかった。その基盤にはハルティア (Haltia) と呼ばれる「超自然的」な存在への信仰がある。ハルティアの語源はゲルマン語派で、母や父を意味していた“Haldias”が本来の形だとされるが、フィン・ウゴル語派の人々は、ハルティアのことをそのものの本来の住人、または主人と呼んでいた (Sarmela 2009: 29, 424)。特定の土地には、その土地のハルティアがおり、動物やそれぞれの種の世話をする女祖先もハルティアを持つと考えられていた (Sarmela 2009: 424)。人々は、自然の恵みはハルティアによってこの世の人間たちに分け与えられるものと考えていたため、狩猟採集文化において人々は自然を独占することはなかった。ハルティアに対する観念から、この「超自然的」な存在が自然と人間を結ぶ重要な存在であったということがわかる。

狩猟採集文化においては、人間と動物の魂を操る能力を持つと考えられていたシャマンが、人間や動物たちの魂と交渉を行うために重要な役割を担っていた。霊界との連絡を作り出す役割があったシャマンは、魂の旅をすることで人間や動物たちの魂と交渉し、狩猟を成功させる手助けをしていた。またシャマンは死者の魂をあの世界へ送ったり、肉体から逃げ出した魂をもとの体に戻したりと、人々の生活の手助けをする存在でもあった。

フィンランドにおいて、耕作が始まったのは紀元前 2500 年から 2000 年の間の新石器時代である。耕作の技術はヨーロッパ文化の知識としてフィンランド南部だけでなく、北部の猟師たちにも共有され、生活の基盤となっていた。しかし、定住型の生活様式を要する耕作はフィンランドの寒い気候に瞬時には適さなかった。気候によって全ての作物が台無しになる可能性のある耕作とは異なり、狩猟採集の方が人々は確実に食料を調達できたため、耕作は浸透しにくかったと言われている (Sarmela 2009: 32)。そのため、人々の生活様式は狩猟採集から焼畑耕作やその後の鋤や鋤を用いた耕作に一変するのではなく、常置の村々では焼畑や鋤耕作、牛を使つての農業を行いながら、男たちは村から遠く離れた場所へ狩猟や漁猟の旅に出かけるという生活様式を作り上げていった。また、狩りや漁猟の旅先の居留地で焼畑をすることもあり、狩猟や漁猟と耕作は並行して行われていた (Sarmela 2009: 33)。

青銅器時代が始まる紀元前 1500 年頃までには、フィンランド西部及び南部の沿岸に住む人々と北部や東部といった、内陸部に住む人々の間で、はっきりと区別できる 2 つの主な文化圏が誕生していた (カービー 2008: 15)。西部及び南部の沿岸に住む人々はハメ人と呼ばれ、スカンディナビアや中欧から強い接触を受けていた一方で、内陸部、東方に住むカレリア人は東方からの文化的な刺激を受けていた (カービー 2008: 15)。14 世紀からは、死者のカルシッコの風習の担い手ともなったサヴォ人と呼ばれるサイマー湖の周りにいた焼畑農民たちが、ハメ人とカレリア人との土地を開拓していった。焼畑によって各地に開拓を進めたサヴォ人であったが、文化圏は東に分類される傾向にある。西と東に分けられる文化圏及び異なる部族が生み出された基盤には地形が関係している。フィンランドの土地は南海岸に向かって南西に走る山脈により沿岸地域と東部に隔てられており、氷河期以降の地盤の隆起によって西と東の地形や土壌の質が異なっている (Sarmela 2009: 34)。フィンランド西部及び南部のハメ人たちの土地は、粘土状の土を含んだ川谷や平野が多く、鋤耕作に適していたため (Sarmela 2009: 34)、農業が文化の中心となっていた。一方、カレリア人やサ

ヴォ人が住むフィンランド東部には森林や荒野、丘が多かったため、焼畑耕作が盛んに行われていたものの、狩猟や漁猟が根強く人々の生活を支えていた。

狩猟採集文化において基盤となっていたハルティアへの信仰やシャマニズムは、焼畑耕作を中心とする文化では祖先崇拜と魔術にとって代わることとなった。この移行は人々の生活様式が狩猟採集から焼畑耕作へと変化していったことと関係している。耕作を中心とする定住型生活では、シャマンを通して動物たちと交渉するというよりも、人々は穀物の豊作や牛の畜産を脅かす動物たちを自分たちのテリトリーから追い払うことに注意を向けた(Sarmela 2009: 39)。耕作経済の始まりは、自然が人間に支配されるものとして考えられ始めた最初の契機である。

狩猟採集文化におけるシャマン的立ち位置は、焼畑耕作文化においては魔術師にとって代わる。魔術師はものや自然物に宿る力、ヴァキ (Väki) を操ることで魔術をおこない、呪文を唱えることで焼畑経済を守り、穀物や家畜の成長や肥沃の力をコントロールする役割を担っていた (Sarmela 2009: 39)。魔術師は悪意のある力や病気、怒り、不幸を追い払い、野生動物から焼畑を守るというような、人々の人生や領域を守るために力を発揮した (Sarmela 2009: 39)。また、魔術師がシャマンと性格を異にする点は、人々の誕生や結婚、死といった人生の通過儀礼を執り行ったことである。

魔術に加え、焼畑耕作文化を支えたのは祖先崇拜である。キリスト教以前のフィンランド西部及び南部沿岸の農業を中心とする地域では、死者は住居近くのヒーシ (Hiisi) と呼ばれる聖なる茂みに埋められるか、開拓地の真ん中の石で隔離された場所に埋められ、死んでからも家族の生活環境を守ると考えられていた (Sarmela 2009: 38)。豊作や恵み、不作といった自然現象は死者である祖先によって決まるとされており、祖先はこの世に生きている者の生活を支え、影響を与える重要な存在として考えられていた。またヒーシの茂みは死者の埋葬場所であると同時に祭儀の場であり、この茂みの存在が残された家族に開拓地の権利を与える役割も兼ねていた (Sarmela 2009: 38)。一部の地域を除くフィンランド東部のカレリア地方でも死者を埋葬する土地はヒーシの茂みであり、そこには捧げものをする木々が立っていた。土地や森、川や湖から得たすべての収穫物の最初のもので、まず祖先が埋められているヒーシに捧げられた。また新しく生まれた赤ん坊や嫁いできた嫁は、新しい家族の一員として死者に紹介された (Sarmela 2009: 39)。そして注目すべきは、狩猟採集文化において自然の主であったハルティアが、焼畑耕作文化では死者や祖先としての側面を担う点である。死者とハルティアが基本的に同じものとして扱われることによって、祖先崇拜とハルティアの信仰はキリスト教が浸透してもなお、形を変えながら深く人々の生活に根差すこととなった。

鉄器時代も後半になると、南西部では鋤を用いる土地耕作が確立し、自給自足の農作業が行われていた。一方東では焼畑耕作と狩猟採集が未だ生活を支えていたが、これも部分的に土地耕作にシフトしていくこととなった。この時代、人々の生活文化や宗教観念に最も影響を与えたものがキリスト教の到来である。スウェーデンからローマ・カトリック教会がフィンランドの西部から北部に伝わったのは1155年、北方十字軍の到来によってであり、時のスウェーデン王、エーリック9世はフィンランドのローマ・カトリック化及び属国化を目指してウプサラ司教であったヘンリック司教を派遣した。聖職者たちは権力による征服を改宗や説教を補うものとして歓迎していたため、王権による征服とローマ・カトリック教会への改宗は同じ意味を示していた。当時のフィンランドは湖と森林が人々の集結を妨げており、未だ統一国家としてまとまっていなかったが、13世紀中頃までには、フィンランドの肥沃な平野部やオーランド諸島の島々にキリスト教社会が誕生していた(カービー 2008: 21)。現在のフィンランド西部の都市トゥルクは当時スウェーデン語でオーボと呼ばれ、ローマ・カトリック教会の本拠地となった。アウラ川沿いに司教区が設立されてからは司教聖堂で

の布教が始まり、布教活動は内陸部のハメ人の地域にも広がっていた（カービー 2008：22）。

一方同時期にノヴゴロドからのロシア正教会もハメ人に接触していた。ロシア正教会は12世紀頃から布教の拠点地を築いていた。1237年にローマ教皇グレゴリウス9世の呼びかけでハメ人に対し十字軍が召集されたことから、ローマ・カトリック教会及びスウェーデン王の軍隊とノヴゴロドの王子アレクサンドル・ネフスキーの軍隊が衝突することとなった。長く続いたこの戦争は1323年に講和条約が締結されたことで終戦を迎えた。両国ともラドガ湖やオネガ湖よりも北方に広がる広大な森林や荒野の住人から貢租を集める目的があったと考えられるため（カービー 2008：23）、布教は二次的なものであったことが窺える。

とはいえ南西部ではローマ・カトリック教会、東部ではロシア正教会が定住型の村々に基盤を築いていた。ローマ・カトリック教会のコミュニティでは巨大な石の教会が現れ、教会が地域における中央集権システムとなった（Sarmela 2009: 49）。特に南西フィンランドの沿岸部では、人々が集まって生活していたことが布教活動に有利に働いたはずである。しかし一方で、内陸部の焼畑耕作民や北方の狩猟コミュニティは移動型の生活で、人々は互いに離れて住んでいたこともあり、何世紀もキリスト教化の外にあった（Sarmela 2009: 49）。

狩猟採集文化のシャマニズムに加え、焼畑耕作文化の信仰基盤であった祖先崇拜と魔術はローマ・カトリック教会とロシア正教会のどちらにとっても異教的な社会秩序の核となるものとして映り、排除すべき観念であった。両者の教えは異教の信仰の要素を部分的に吸収しながら、人々の生活に浸透していった。ローマ・カトリック教会とロシア正教会は両者とも、自分たちの教会をヒーシの茂みである聖なる場所に建て、土着の民間信仰や宗教儀式をキリスト教の教えに変換しようとしていた（Sarmela 2009: 49）。ヒーシの茂みを侵略したローマ・カトリック教会は、埋葬場所を教会の保護下へ移すことで死者を所有し、キリスト教の教義の中に祖先崇拜を取り込もうとしたのであった。捧げものをする茂みについて最も早い歴史上の記述は、1229年にローマ教皇グレゴリー4世が教会にハメ人の異教徒の捧げものを行う埋葬地を所有するよう要請したという記述である（Sarmela 2009: 116）。このようなキリスト教改宗への転換期の中で、もとは祖先が埋められた聖なる場所という意味を持っていたヒーシという言葉自体も、キリスト教の文脈においては悪魔のようなネガティブなイメージを持つようになった。

16世紀から17世紀には宗教改革の波がスウェーデンを通してフィンランドにも押し寄せ、ローマ・カトリック教会に代わりルーテル派教会が広まった。ルーテル派教会は、人生における儀礼や人々の生活に組織的に関与しながらその宗教文化を強めていった。17世紀以降、聖職者たちは人々をキリスト教の神に近づけることに情熱を持ち、東カレリア地方や北カレリア地方まで布教範囲を広め、異教に関わる樹木や石、聖なる場所を破壊し、異教の祭りや儀式、祖先崇拜を非難していくが、古くからの信仰を絶えさせるには困難を極めた。実際、焼畑耕作をしていたサヴォ人の間では近代になってもヒーシの茂みの名残と見なされる捧げものが行われる木々などが残っていたし、死者がかつて住んでいた場所に戻ってきたり、親族の中に生まれ変わるという信仰や生きている者は死者の世話をしなければならないといったような考えは完全には破壊されていなかった（Sarmela 2009: 119）。

17世紀後半以降ルーテル派教会は、サーミ人の住む北部まで布教を行っていた。1686年の宗務局の記録には「この地では悪魔を崇拜する者たちが生き長らえ、両足に枷をはめられ、偶像と神に仕えている」と書かれているが、1748年にはクーサモ南部の小教区に暮らすサーミ人はキリスト教のみならずフィンランド語も受け入れているという報告がなされている（カービー 2008：62）。こ

の時代、サーミ人が狩猟経済を中心とする生活をしてきた地域では、焼畑農業を行うフィンランド人入植者によって狩猟社会を支える生態系が脅かされており、サーミ人は新しく来た人々の経済に適應するか、その場を離れるかの二択に迫られていた(カービー 2008: 63)。そのような生活の不安定さの中での布教は案外上手くいったのかもしれない。

一方、フィンランド東部において比較的村が密集していたカレリア地方を中心に信者を獲得していたロシア正教会はルーテル派教会と比べ、異教に対して寛容で、祖先崇拝や死者の埋葬地、親族の結婚式や葬式における多くの民間信仰をその伝統の中に吸収したと言われている(Sarmela 2009: 44)。しかし1534年にはノヴゴロドのマカリー大司教の命により派遣されたロシア僧のエリアスによって、カレリア地方では異教要素の抹消に向けた改革と監視管理がなされたため(Purmonen 1981: 17)、人々の間からこれまでの儀式や信仰が排除されていったことも確かである。この際、捧げものがなされていた埋葬地は完全に破壊され、死者やハルティアに供え物を捧げる石を水の底に沈めたという記録も残されている。

このような生活と宗教的世界観の変化の中で、人々は臨機応変に死者や精霊との関係を創りあげてきた。本論文で言及する死者のカルシッコもまた、キリスト教化の中で人々が編み出した風習だと考えられている。次章ではカルシッコの基本的情報について記述する。

2. 死者のカルシッコ

2-1. 死者のカルシッコとその形

今日フィンランドにおいてカルシッコというと、死者のイニシャルと生没年、十字架が刻まれた樹木やその印を指す死者のカルシッコを示す場合が多いが、カルシッコには実に様々な種類があり、結婚や、たくさんの収穫をしたとき、初めて都市または市場への旅に出るといった重要な出来事の記念として、樹木の枝や、ときに樹木の最上部が切り落とされることで作られていた。前述したように、カルシッコの語源がフィンランド語で「枝を切り落とす」という動詞に由来していることから、枝を切り落とすことが本来カルシッコを作る方法であったことがわかる。カルシッコの形態もその目的によって多様であった。

本論文で取り上げる死者のカルシッコは、フィンランド東部、特にサヴォ地方において確認されている。民俗学者のVuorelaが記した“*Kansanperinteiden sanakirja* (『民間伝統辞書』)”(1979)によると、死者のカルシッコは死者を墓に運ぶ際に針葉樹を選び、道沿いの枝をいくつか切りとるか、樹木の最上部を切ることで作られていた。死者のカルシッコの枝は死体を教会へ運ぶ旅の途中で切り落とされ、その形は死者が結婚しているか否かで異なっていた。死者のカルシッコの作り方は地域によって大きく異なるとされているが(Pentikäinen 1990: 57)、もし死者が結婚していたらふたつの枝を手のように残す。結婚していなければ一つの枝を手のように道の方に向ける。この「手のように」というのが、カルシッコの枝について頻繁に用いられる言い回しであり、カルシッコの樹木と人間が身体的に重なる点でもある。この「手」は方角を示していると同時に、その人の社会的地位を示すものでもあった(Pentikäinen 1990: 57)。枝を切り落とすことで印付けされていた樹木は、既に古代からサヴォ人の定住地域において存在しており、人々はこのような樹木を使って道や場所、ルートや境界を印づけていた(Vilkuna 1992: 157)。カルシッコはそれ自体がメッセージであり、以前からサヴォ人の間でよく知られている方法であった。

死者のカルシッコは後の習慣で樹木に死者のイニシャルと生没年、十字架を刻むか、それらの印が刻まれたボードを樹木に釘で打つという形式になった(Vuorela 1979: 144)。また19世紀以降の

習慣で、死者のイニシャルや十字架、埋葬年などは石に刻まれたり、それらの印が刻まれたボードが建物の壁に取り付けられることもあった。Vilkuna (1992) は樹木以外に作られる石やボードのカルシッコを「カルシッコの第二派」(Vilkuna 1993: 143) と呼んでいる。なお、石のカルシッコは墓石とは異なる。

死者のカルシッコは、それ自身が生者の領域と死者の領域を分ける境界だとされ、家と墓場を結ぶ道の途中で作られた。死者が家に帰ろうとしたとき、死者は道の途中で自分のカルシッコを見て、自身が既に死んでいることに気づき、墓に帰るとされた。死者のカルシッコは死者を生者のコミュニティから切り離すことで、死がもたらす社会の不秩序を修復し、生きている人々の生活を死者による妨害から守る存在であったのだ (Vilkuna 1993: 144)。

2-2. 風習のはじまりと担い手たち

カルシッコの起源については、これまで多くの研究者が独自の意見を述べてきた。Hornborg (1886) はキリスト教以前の異教時代における聖なる木立ヒーシがカルシッコに発展したという見解を述べ、Waronen (1898) は死者の魂は木々や木立に住むことができるという考えを基盤に、かつて荒地に住む人々が死者を家の近くの古い松の根元に埋め、その木立に捧げものをすることで死者に敬意を示すための死者や魂への奉仕の古い形をとどめたものだとした (Waronen 1898: 97)。Holmberg (1924) はこれらの意見を否定し、中央ヨーロッパとバルト諸国及びスカンディナヴィアで知られている儀礼との類似性を述べた。その後 Pentikäinen (1990) が Holmberg (1924) の視点をやや引き継いだ形で他国の儀礼と比較し、カルシッコの風習は死体の運搬時に思い出のボードを取り付けるヨーロッパの風習に影響を受けているとした。また Pentikäinen (1990) は、カルシッコの風習は東フィンランドに特有のもので、ルーテル派教会のものであるとしたが、その根底には初期のローマ・カトリック教会の教えがあることを指摘し、正教会との違いについても言及した。これを受け Vilkuna (1992) は風習の担い手であるサヴォ人の移動と照らし合わせて、死者のカルシッコの起源を定めることに努めた。以下に示す彼の見解は、死者のカルシッコの起源説として今日最も有力なものである。

Vilkuna (1992) は宗教改革と15世紀の終わりから始まった焼畑開拓によるサヴォ人の移動とを照らし合わせることで、16世紀の終わりから17世紀を死者のカルシッコの始まりとして定めている。Vilkuna (1992, 1993) によると、この風習は主に東フィンランドのサヴォ地方と北カレリア地方の西部に住むルーテル派教会に属している人々の間で行われてきたもので、正教会の人々の間では行われていなかった。図1は死者のカルシッコと十字架の木の分布図である。死者のカルシッコの担い手となるサヴォ人は13世紀の終わりまでに、既にカレリア地方にまとまっており、正教会へ改宗していたとされている (Vilkuna 1992: 155)。この時代、スウェーデン王国とノヴゴロドは度々急襲や反撃を繰り返し、衝突が絶えなかった。1293年には、カレリア地方へスウェーデンが十字軍遠征をおこない、長期の戦争を引き起こした。1323年にパフキナサーリの条約が締結されると、正教徒であったサヴォの人々はローマ・カトリック教会の西の文化圏へ取り込まれることとなった。サヴォ人は焼畑耕作民として知られており、14世紀から17世紀にかけては東フィンランドの丘に広がり、西部のサタクンタや中央オストロボスニアにも広がっていた (Sarmela 2009: 33)。

ただし、サヴォ人が移住した場所では、必ずしも死者のカルシッコの風習を確認できるわけではない。約1580年までサヴォ人が住んでいた地域にも関わらず、死者のカルシッコが全く知られていない地域もある。繰り返しになるが、フィンランド西部のルーテル派教会の人々が暮らす地域と、

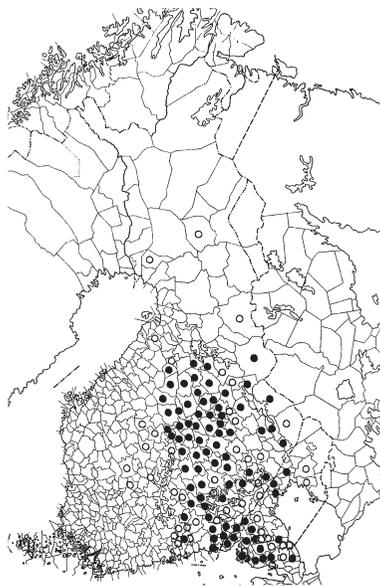


図1. フィンランドの死者のカルシッコと十字架の木の分布図。黒丸は死者のカルシッコと十字架の木の風習が行われてきたという情報が2つ、またはいくつかあることを示し、白丸はそれらの情報が1つだけであることを示している。(Vilkuna 1992: 40) より抜粋。

フィンランド東部でもロシア正教会に属する人々が暮らす地域では死者のカルシッコの風習は確認されていない。これらのことが、Vilkuna (1992) による死者のカルシッコの起源に迫る鍵となっている。つまりサヴォ人が移動を終え、各地に定住した後である16世紀の終わりから17世紀頃に、宗教改革の波を受けた東部のルーテル派教会の人々の間で死者のカルシッコの風習が整えられていったという仮説が立つのである。

2-3. 死後の世界とカルシッコの誕生

カルシッコ誕生の経緯について絶対的なことは言えないが、Vilkuna (1992) の推測によると、死者のカルシッコの風習は宗教改革以降に整えられたとされている。まずはローマ・カトリック教会とロシア正教会、後のルーテル派教会の違いから見ていきたい。これらの違いには煉獄の教えがある。煉獄という概念は、ローマ・カトリック教会において最後の審判の前に死者の魂が苦しみを受けながら浄化される場所であり、最後の審判の日に消滅するものとされている。しかし、煉獄の観念を定義することは、長らく神学者たちの中で先延ばしにされていた。聖書や教父たちの著書では、煉獄という観念について明記されていないためである。死後、魂は死者の世界の特定の場所で浄化の手続きを踏むことは信じられていたが、その場所はどちらかという地獄の一隅のようなところと考えられており、天国や地獄と並ぶ独立した「王国」ではなかった(グレーヴィチ 1995: 183)。しかし12世紀後半、パリの教師たちやシトー会修道者会の後押しによって「煉獄」という言葉が生まれ、13世紀によく教義上で定式化されることとなった。

ローマ・カトリック教会によって公認された煉獄の概念であったが、正教会は聖書に明記されていないとして「煉獄」を否定した。フィンランドでローマ・カトリック教会に取って代わることとなったルーテル派教会も正教会と同じ理由で否定した。ルーテル派教会の死者の立場に関する見解

によると、魂はある種の待機場場に留まっており、魂は神の目覚めにおいて、最後の日に目的地、すなわちあの世に辿りつくというものであった。そのため、人々は死が完了していない死者が動き回り、生者の生活領域に帰ってくることができると考えた。このことは、これまで以上に死者への恐怖を強めることとなった。

人々にとって、死者のこの世への出沒は避けるべき課題であり、死者の魂は確実にあの世に送られるか、少なくとも生者の領域であるこの世にやっつこないようにする必要があった。キリスト教以前もローマ・カトリック教会の時代も、死者はこの世から、死者のコミュニティであるあの世という目的地へ送られた (Vilkuna 1992: 158)。ローマ・カトリック教会の場合は、煉獄の存在によって最終地点への到達は遅らされているが、全ての魂は死後の世界で明確な居場所があると言える³⁾。

しかし煉獄を否定したルーテル派教会がフィンランドで広まったとき、状況は一変する。Vilkuna (1992) の指摘では、ルーテル派教会の教えにおいて埋葬は移行儀礼ではなく、分離儀礼として執り行われた。最終的に魂が移行するのは最後の審判においてであるから、死後すべきことは死者を生者のステージから切り離し、生きている人々に希望を持たせることであった。しかしこのことによって死は未だ完了せず、死者の魂は死と最後の審判までの間、不安定な状態に置かれることとなった。特に重い罪を犯した死者の魂などは、穏やかさを得ることができず、死してもなお動き回り、墓場を抜け出して家に帰ろうとすると考えられた。死者を生者の領域に入つてこさせないようするためには、目に見える形で死と生の境界線を設けなければならない。この境界が死者のカルシッコである。

上記の理由から、ルーテル派教会時代以降に確立したと推測される死者のカルシッコだが、煉獄を認めないロシア正教会の地域でもカルシッコは確認されていない。その理由として考えられるのは、ロシア正教会が布教以前の人々の葬式形態を取り入れたためだと考えられる。例えばロシア正教会下のカレリア地方の人々の葬式における泣き歌などの儀礼からは、人々が死者は死後、死者のコミュニティに行くと考えていたことが垣間見える。天国や地獄ではない死後の世界への考えを保持していた人々にとって、死者の帰還を防ぐカルシッコのような境界は必要なかったのであろう。

最後に死者のカルシッコの出自について記述すべきは、ルーテル派教会の西部と東部の違いである。つまり、なぜ同じルーテル派教会に属しているにも関わらず、西部では死者のカルシッコは確認されず、東部のサヴォ地方を中心とする地域では死者のカルシッコが生まれたのかという問題である。Vilkuna (1992) の見立てでは、キリスト教の受容と埋葬時の教会への旅が関係している。西部フィンランドにおいてキリスト教が受け入れられた時、ローマ・カトリック教会はかつての信仰の崇拜場所、崇拜時期や儀礼を支配し、キリスト教の教えに適合させた。特にローマ・カトリック教会とその後のルーテル派教会は異教の埋葬地の中心に教会を置いたために、異教時代の埋葬地はそのままキリスト教の教会地になった (Vilkuna 1992: 161)。そのため、人々は今まで通り死者をその土地へ連れてきて埋葬した。加えて、埋葬のために死者を運ぶ道のりは、フィンランド東部に比べると西部では短かったと言われている (Vilkuna 1992: 161)。そのためか、キリスト教を受け入れ

3) ただし、死者のコミュニティに行き、居場所があるからと言って、一切死者が生者の世界に干渉しないというわけではなく、むしろ死者は生者の世界に死んでもなお関心を持っていて、やり残した地上での問題に決着をつけたり、他界での自分の地位を向上させるために生者の世界へやってくるのであった (グレーヴィチ 1995: 108)。

た初期の段階で既に村の中心に教会の土地の柵があり、生者と死者のコミュニティーの境界柵として紹介されていた (Vilkuna 1992: 161)。そういうわけであるから、ルーテル派教会に変わった後も死者のカルシッコのような新しい境界は必要なかったであろう。

しかしキリスト教の布教は東部では上手くいかなかった。ローマ・カトリック教会からルーテル派教会に変わって以降、ルーテル派教会の聖職者たちは東部の異教徒の改宗に積極的に乗り出していったが、東部の人々の生活は西部の定住型の農民コミュニティーとは大きく異なっていた。人々は互いに離れて暮らしていたし、東部の人々の狩猟や漁猟、焼畑による開墾を基盤とする民間信仰は彼らの生活の中に強く根付いており、布教は進まなかったようだ。新約聖書をフィンランド語に翻訳したオーボ司教のミカエル・アグリコラは、北サヴォ地方を訪れた1549年に、民衆のキリスト教の知識のレベルの低さについて不満を言っている (Lavery 2017: 221)。東部や北部の森林地帯では、ローマ・カトリック教会時代でも、その教義はあまり浸透していなかったのだろう。キリスト教以降、東部の人々も西部の人々と同じように、それまで死者を埋葬していたヒーシの木の茂みではなく、教会の土地に死者を埋葬するように要求されていたが、特に宗教改革以降のルーテル派教会は、埋葬地を教会の土地に移すことを強く要求し監視した。しかし、教会は西部のように街の中心にあるのではなく、住む場所によってはかなり遠い場所にあった。特に教会から遠くに住んでいる人々にとって、この新しい埋葬地はこれまで死者を埋葬してきた土地とは離れているうえに、何らゆかりもない土地だっただろう。このことは、ルーテル派教会に改宗して、これまでの埋葬地とは異なる場所に死者を埋葬しなければならなかった当初の人々にとって危機となったに違いない。また、もし人々の間でローマ・カトリック教会の煉獄の観念が知られていたとしても、Vilkuna (1992) が指摘したように、ルーテル派教会ではそれが否定されたことによって、もはや死者があのお世に行ったのかも曖昧であるから、死者が帰ってこないようにカルシッコという生と死の境界を示す印を作らなければならなかったと推測できる。

2-4. 社会と思考の変化と風習の衰退

これまで死者のカルシッコの風習は、その歴史の中で多くの変化を経験してきたと言われているが、その変化は今日でも続いている。しかし、現在のフィンランドではこの風習を知っている人は限られており、終わった風習とみなされている。確かに、今日カルシッコの風習を続けている人は恐らく片手で数えられるくらいだろうし、続けているとしても風習を続ける意味は大きく変化している。Vilkuna (1992) は19世紀後半以降、近代化における風習に対する軽蔑のまなざしや経済と社会の変化によって、死者のカルシッコの機能も変わり、風習自体も衰退しつつあることを指摘している。

19世紀後半以降、死者のカルシッコの機能は、死者を防ぐものから死者を思い出すものへと大きく変化した。そのことは、1850年代以降死者のカルシッコが墓場に通じる道の途中から家の敷地内や庭に移されたことから明らかである。死者のカルシッコの移動を可能にするためには、既にカルシッコの生と死の境界としての機能と死者が返ってくることへの恐怖が人々の間からなくなっていなければならない。死者に対する恐怖が急速に薄らいでいくのは、科学による証明が人々の判断基準として優勢になっていく過程においてであるが、科学が人々の間に浸透していく以前に、既にカルシッコの風習には思考の変化が訪れていた。初めにこの変化をもたらしたのはルーテル派教会の働きであった。牧師たちはいくつかの場所で死者が動き回るという間違っただけの人々の考えに基づく風習を消そうと努め (Vilkuna 1992: 139)、その教えに従ってコミュニティーの中で発言力のある人が

死者は墓場で眠っていて帰ってこないことを人々に論ずという語りも残されている (Pentikäinen 1990: 57)。

このような思考の変化だけでなく、実質的な変化として18世紀から始まる人口増加と土地改革もカルシッコの移行に影響し、その意味を変えた。それまでは、庭や畑を含む個人の家とその先の草地の境界線は明確には決められておらず、草地は村の共有地であった (Vilkuna 1992: 134)。サヴォの土地改革は1801年から1860年にかけて実施され、村共通の森は家ごとに分けられて、残った土地は国の所有になった。死者のカルシッコが誰の土地でもない道の途中に作られていたことを考えると、土地改革後のカルシッコは国の所有地として新しく国道が作られる際に切り倒され、木材として製材所に運ばれたことが考えられる。人口増加による土地改革はカルシッコが個人の家の敷地内に作られるようになった要因であり、Vilkuna (1992) が推測するように、1850年代以降、庭の石や家の建物の壁にカルシッコが作られたことにも由来している。

実質的な土地改革は人々の集合的な人生観から個人的な人生観への内面的な視点のシフトも伴っていた。この視点のシフトによって、これまでの価値や死者に対する信仰、風習への考えが変わり、最終的には風習を衰退に導くこととなった。集団的な人生観においては、ある地域の集団は価値や信仰を共有し、それを世代ごとに引き継いで生きていた。けれども個人的な人生観では、個人が学び、自分の人生を自分で決定するようになった。風習の次の担い手となるはずの若者たちが、死者のカルシッコの風習を古い魔術信仰だとして軽蔑のまなざしを投げかけたことから (Vilkuna 1992: 140)、集団的人生観から個人的人生観への観念の推移が垣間見える。このような思考の転換は、それまでの自給自足の生活から林業を基盤とした金融経済へ舵を切った人々の生活の変化にも拍車をかけることとなった。取るに足らないものとしてみなされ、むしろ軽蔑のまなざしを向けられたカルシッコの木は、新しい世代の人々や森林管理者によって切り倒されていったのであった。

3. 死者のカルシッコの現在

3-1. 調査地：北カレリア地方ユーカ

本章では、18世紀後半から今日まで死者のカルシッコの木を受け継いできた夫婦のもとで行ったフィールドワークをもとに、風習を続ける家族とカルシッコの現状を描く。フィールドワークは2018年8月下旬の予備調査と2019年9月から2020年3月までのフィンランド滞在期に行った。本章での登場人物は夫婦のティモとイーリス、イーリスの2人の姉エルサとライヤである。彼らからはそれぞれ調査承諾書にサインをもらっており、論文での名前及び発言の使用についての承諾を得ている。また本論に記述している彼らの語りは、一度英語及びフィンランド語版で彼らに見せたものである。

夫婦が住む街は北カレリア地方のユーカ (Juuka) という。首都ヘルシンキからヨensuuという東の都市まで列車で4時間、そこからバスか車で1時間の場所にある。列車の窓から見える景色はすぐに都市から森に変わり、時折湖が見える。ユーカはビエリネン湖と呼ばれるフィンランドで4つ目に大きい湖の西岸にも面する森と湖に囲まれた地域である。現在ユーカは中心部となる教会村⁴⁾と呼ばれる地域に加え、その他20の小さな村で構成されている。イーリスとティモは教会村に

4) 教会村はその名の通りルーテル派教会の教会がある地域で、スーパーや日用品売り場があり、ユーカ全体の中心である。

属する区域に住んでいるが、彼らの家に辿り着くためには中心部の大通りからはずれ、湖に面した岸辺まで森の奥深くに入っていかなければならない。まさに森の中、人の気配はほとんどない。もともとはイーリスの家系ヌーティネン家が農場を営みながら代々住んできた土地で、現在は夫婦だけで住んでいる。敷地内には、200年程前の家畜小屋や穀物庫が今なお立っている。今では家畜もおらず、農場も営んではいないが、かつての暮らしぶりが垣間見える。

3-2. ヌーティネン家のカルシッコ

庭から少し外れた森の、小道の傍らに彼らのカルシッコの木がある(図2)。その木は明らかに周りから浮いている。樹木に刻まれた数字やアルファベット、取り付けられている木のボードがその異様さの原因であるが、立ち枯れて木の最上部や枝を落としてもなお、枝をまばらに広げている様子が、その木を一層目立たせている。樹木には1771年からその土地で農業を営んできた主人、または女主人の印がある。樹木に直に削られた部分は年代の古いもので、目視できる限り1869年までの印が刻まれ、樹木に取り付けられたボードに記されているのは1822年に生まれ、1943年に亡くなったイーリスの祖父以降の死者の印である。最も新しい印は1991年に亡くなったイーリスの母トイニのもので、印が刻まれた木のボードも他のものよりも明るい色を保っているが、その上部には既にうっすらと苔が生えている。カルシッコの木はその姿から、その土地に住んできた家族の歴史を語る樹木なのだ。



図2. ヌーティネン家のカルシッコ
(2018年8月筆者撮影)

ヌーティネン家のカルシッコの木には1844年と1869年に亡くなった主人、同じく1869年に亡くなった女主人への印がかつて樹木に削られていたが、1920年代には木の成長によってほぼ閉じられており、風習はもはや行われていなかった。1920年代、家の主人はカルシッコの木について息子たちに話し、息子たちは実際にナイフで削られた数字を見た。彼らは興味本位で、樹皮をより広く切り開き、その木が本当にカルシッコの木であることを知った。ヌルメスの学校で、彼らの教師がカルシッコについて話し、1926年に彼らの母親が亡くなったのをきっかけに、2番目の兄がカルシッコのボードを母親に作ることを思いついた。加えて1903年と1912年に亡くなった主人と女主人にも作ることにした。1943年の父親の死の際にボードを作り、1971年に兄弟が亡くなった時にも同様にした。一度行われなくなった風習が、もう一度始まったという特殊な経緯から、ヌーティネン家のカルシッコの木は樹木に直に削られた部分とボードを取り付けた部分を持つ新しい形をしている。

しかし、前述したように、現在彼らのカルシッコの木は既に樹木の最上部が落ち、木の皮も剥がれ落ちている。本当に、いつ倒れてもおかしくない状況だ。1968年に車が通れる新しい道が出来たために家族は狭く古い道は通らないし、意図的にカルシッコの木を見に行くことはない。車、都市部へ通じる新しい道、職業の変化、近代化の波によってカルシッコの風習は廃れてしまっているように思えた。しかし、だからといって彼らがカルシッコの木のことを忘れてしまっているわけでは

ない。人々は時代の変化を受け入れながらも、カルシッコの領域をどことなく認め、敬意を抱き、それぞれのやり方で樹木と繋がっているのである。

3-3. それぞれのカルシッコ

紅茶を飲みながら、イーリスは小さい頃の話を持ち出して、カルシッコの木について話してくれた。「昔は町に繋がるのはカルシッコの木が立っている古い道しかなかったから、小さい頃は毎日カルシッコの木の傍を歩いて学校に通っていた。」小さい頃の彼女はカルシッコの木がどのようなものか知っていたので、「カルシッコの木は大切だけど、少し怖い存在だった。」と腕を寄せて怖がるジェスチャーをした。しかし現在は怖いという感情はなく、家族のルーツのひとつとして尊敬していることを教えてくれた。カルシッコの木は家族の歴史を体現していると同時に、尊敬の対象となっていることがわかる。

一方、結婚してからユーカに住み始めたティモは、それまでカルシッコの風習について全く知らなかった。彼がユーカにやってきたのは40年前で、まだイーリスの母トイニが生きていたときだった。ティモはカルシッコを「いい友人」といい、カルシッコのある場所を聖なる場所であると認識している。つばを吐くような失礼なことはしないし、カルシッコのことをポジティブなことだと誇りに思っている。

夫婦が住む家からカルシッコの道を進んだところに住むイーリスの一番上の姉エルサは自分の家からイーリスとティモの家に向かう途中、カルシッコの木の下で立ち止まっては亡くなった祖父や父、母のことを思いだしているという。特に祖父に関する記憶は三姉妹の中でも彼女だけが持っている。カルシッコの木から少し離れたところに人が一人腰かけられるほどの石があるが、小さい頃のエルサの記憶に残る祖父の姿は、その石に腰かけているというものだ。この石は一度水道管の工事のために動かされたが、工事が終わった後にティモが元の場所に戻したものである。今では彼女がその石に腰かけてカルシッコの木を眺めるのだと言う。自分と祖父の姿を重ねているのだろう。また、木に刻まれた一番古い年である1777年の印を見て、この当時の人々の暮らしがどうだったかを想像していると話してくれた。

妻の二番目の姉ライヤは時折カルシッコの木に花のデコレーションを持っていく。それは特にながりのあった両親に対してだという。彼女はユーカから離れたカヤーニという場所に住んでおり、普段はカルシッコの木や思い出の残る風景と離れて暮らしている。カルシッコに何かを持って行くという行為からは、カルシッコが彼女にとって、どこか墓のような側面をも持っていることが窺える。また、三姉妹と筆者でカルシッコの木を見に行ったとき、カルシッコのボードを眺めて佇んでいた彼女の姿は印象的で、カルシッコの向こうに別のものを見ているような目をしていて、ライヤはイーリスとは違い、小さい頃カルシッコを怖いと感じたことはなかったが、聖なる場所という認識はあった。またカルシッコはみんなの人生を示すもののようにも考えていた。

このようにイーリスとティモ、エルサやライヤは家族として生きてきたとはいえ、それぞれのカルシッコの木との繋がり方は異なっている。彼らは歳が違うし、見てきたことや記憶や思い出も違う。例えばイーリスが小さい頃怖いと思っていたカルシッコはライヤにとっては聖なるものと捉えられていた。皆それぞれにカルシッコの木を尊敬しているが、ティモにとってのそれは聖なるものでもあり、同時に友人のような存在であるし、ユーカから離れた土地に住むライヤにとっては墓のような役割も果たしていた。またエルサにとってのカルシッコはその空間と石との関係性によって、より浮かび上がるものであった。カルシッコの木はそれに向き合う人ごとに、異なる表情を見

せる。彼らはそれぞれのやり方でカルシッコの木と繋がっているのである。

3-4. カルシッコの領域

これまでに示した家族の語りからはカルシッコへの尊敬の色が見え、聖なる場所として認識されていることがわかった。そのような認識は彼らの態度や思考にも現れている。

11月3日、フィンランドのお盆を過ぎた頃、カルシッコの道を歩いてエルサの家にイーリスと向かったことがあった。外は既に雪が積もっていて、森もしんとしていた。その日の朝食で、筆者はイーリスからカルシッコの道では静かに歩くように言われていた。家から歩きだした私たちは、最初話しながら歩いていたのだが、カルシッコのある古い道と新しい道の分かれ道でイーリスは口をつぐんだ。古い道を歩いている間私たちは黙って歩き、カルシッコの木の前までくるとイーリスは立ち止まってしばらく木を眺めていた。そしてまた歩き出し、カルシッコから離れたところで森の一角をスティックで指し「ここは昔、草原で木はなかったけど、今は木が生えてるわね。」と言った。彼女は子どもの頃、2人の姉と共に毎日この道を歩いて学校に通っていた。カルシッコを見て子どもの頃に見ていた風景がよみがえったのだろう。彼女の振る舞いから、カルシッコの木とその周りの森を乱したくないという想いが読み取れた。

加えてカルシッコの木の近くに小屋を建てた話⁵⁾は、カルシッコの木の領域に関するものとして重要である。小屋が近すぎたためにカルシッコの木が諦めて枯れようと思ったのではないかという考えは、樹木の主体性が窺える話であり、カルシッコの木の領域を暗に示している。生活の中ではその領域を乱さないことが心掛けられている。また彼らのカルシッコの木は既に枯れていて、最上部の枝やボードは落ちたそのままになっているが、このこともカルシッコの領域を乱さない心がけの一つのように思われる。

3-5. カルシッコの機能

本来のカルシッコの機能は死者を墓場に帰すものであった。しかし Vilkuna (1992) は先行研究の中で、カルシッコの機能は死者を防ぐものから死者を思い出すものとして変化したことを指摘した。確かに、前述したカルシッコに対する家族の語りからも、カルシッコはもはや死者の帰還を防ぐものではなく、死者を思い出すものとして働いていることが確認できる。そこには2-4で示したような死者に対する考え方の変化も窺える。また、時代は変わり、墓には車で行けるし、今では写真やビデオがある。それらは樹木に刻まれた印よりも視覚的に死者の面影をリアルに残しておくメディアである。このような時代の変化の中で、カルシッコの風習はその意味を少しずつ失ってきたのだ。

しかし、カルシッコは単に死者を思い出させるだけではなく、かつての人々の暮らしをイメージさせたり、死者と過ごした風景を思い出させることで現代と比較する、いわば時空の物差しのような役割をも果たしている。イーリスがカルシッコの道を歩きながら話したことは小さい頃見た風景と今の風景との違いについてだったし、ライヤがカルシッコの向こうに見ていたのは彼女の記憶の中にある人々や景色だったのかもしれない。カルシッコはその場とともに、人々にかつての生活や死者を思い出させる。人々の生活はカルシッコのある風景とともにある。そのため、カルシッコの

5) ユーカでのフィールドワークを通して明らかになったカルシッコの機能について詳しくは田中佑実 2020「カルシッコの風習—フィンランドの樹木と共に生きる世界—」北海道民族学第16号を参照。

あるその風景の中には人々のかつての生活や死者と過ごした思い出が埋め込まれているのである。家族は視覚だけでなく、嗅覚、聴覚を含めた全身を通して思い出している。それは主に視覚を中心に訴えかける写真やビデオのように四角の枠におさめられた景色や、年に数回しか訪れないあまり馴染みのない墓よりも強く死者を想わせる、現代のカルシッコの機能のように思われる。人々が墓を訪れるのは、基本的に10月最終日のピュハインパイヴァ（Pyhäinpäivä）とクリスマスである。ピュハインパイヴァはハロウィンに当たる日だが、フィンランドでは死者を想う日となっており、蠟燭を置きに墓参りをする習慣がある。また人々はクリスマスにもピュハインパイヴァと同じように墓参りをする。また、これらの日にはルーテル派教会でミサも行われる。しかし、これらの日にカルシッコの木に対して何らかのアクションがなされるわけではない。家族の生活の中で、あえてカルシッコを見に行くという事は行われない。カルシッコの木が機能するのは、人々の生活の流れにおける、ささやかな瞬間なのである。

3-6. 風習の終わり

前述したように、彼らのカルシッコの木は立ち枯れている。カルシッコの木が倒れることについて、イーリスはこのように述べた。「永遠はない。木は人間のようね。歳を取って死んでいく。人間がいつか倒れるように、木もいつかは倒れる。木も人間も野菜も鳥も同じように生まれて死ぬ。それがエラマ（elämä）だから。」「エラマ」という言葉は次章でより詳しく記述するが、人生やいのちという意味を持つ言葉である。家族は皆同じように、カルシッコがいずれ倒れることは自然なこととして見ていた。また、ティモがカルシッコの木の死について述べた言葉は印象的であった。「今カルシッコの木が立っているあの場所がカルシッコの場所なんだ。自分たちはヘルシンキに移り住もうとは思わない。ここが自分たちの場所で、根っこだから、ここで死ぬ。カルシッコの木もあそこで生まれてあそこで死ぬんだ。」イーリスも「カルシッコは自分の家族がいて、そこで育って、次の世代もいる。私とティモはあの場所がカルシッコの場所だと考えている。」と言っていた。樹木も人もそれぞれの場所で生まれて、それぞれの場所で死んでいく。生きるということは死を含むことを認め、それを自然なこととしているのであった。

立ち枯れのカルシッコの木は、風習の終わりを示している。20年前はカルシッコの木の状態もよく、青い葉を茂らせており、夫妻は自分たちが死んだときには家族の誰かが自分たちの印を刻んでくれるだろうと思っていた。しかし、今日のカルシッコの状態は悪く、いつ嵐が倒してもおかしくないとイーリスは言う。自分たちが死んだあかつきには、カルシッコにボードを取り付けてもらいたいと考えてはいるが、取り付けられるかわからないのが現状である。しかし、だからといって彼らは新しいカルシッコの木を作ろうとは考えていない。彼らにとって新しい木にカルシッコを作るようなことは真の伝統ではなく、ばかばかしいことに感じられる。「別の木に刻もうか」といたずらっぽく言ったティモに対して「いや、もう続けない」といったイーリスのやりとりから、そのことは十分に感じ取れる。彼らにとってカルシッコは立ち枯れているあの木だけなのだ。

4. エラマ

家族にとって、カルシッコの木は樹木と人間がともに生きてきた歴史をその身をもって体現する存在である。カルシッコの木は単なるモノではなく、それ以上の存在である。3-6で示したイーリスの言葉にあるように、風習が終わりに直面している現在において引き立つのは立ち枯れとなっているカルシッコの木自身の「エラマ」であり、カルシッコに印が刻まれている祖先と自分たちの「エ

ラマ」である。しかしここで述べられる「エラマ」は現代のカルシッコの風習を続ける家族の中でも、今回筆者が調査した家族に限定されるものである。カルシッコの風習自体、これまでの歴史の中で様々に変化を経験しており、ここに述べるカルシッコの木と人々の繋がりは現代というある一片の、ある家族のものであるため、カルシッコの風習に一般的なものとして普遍化することはできない。しかしこれまでのカルシッコの文脈において直接的に「エラマ」という言葉は用いられてはいなくても、アーカイブ資料に現れるカルシッコと人々の連続性や Kovalainen と Seppo の“PUIDEN KANSA”をもとに簡易邦訳された『フィンランド 森の精霊と旅をする』(2009)で記されているカルシッコに対する現代の家族の語りでは、カルシッコの木と家族の「エラマ」の共有について暗に示されてきた。例えばアーカイブ資料では、カルシッコの樹木を伐り倒したら、伐り倒したその本人または家族に不幸が降り、死んだというような語りは頻繁に表れるし、現代の家族からは以下のような語りがなされている。「春の種まきの季節に、父さんとふたりでカルシッコの木の横を通りかかったとき、大きな枝が折れて別の枝の付け根にぶら下がっているのを見てどんなに驚いたことだろう。どう説明していいのかわからない光景だった。風はまったくなかったし、折れた枝はいたって生き生きとしていた。その年の8月、父さんが突然亡くなった。動物はあらゆる種類のことを敏感に察知することができる。いったい木はどうなのだろう」(コヴァライネン&セッポ 2009: 91-92)。これらはどちらも死によってカルシッコの木と家族の生の連続性が現れている。特に筆者の調査地では、カルシッコの木は立ち枯れとなっており、家族も初老を迎えていることから、両者にとって、生きて、死んでいく「エラマ」の概念はより引き立つものとなっている。そのため本論文では、カルシッコと家族を結ぶ重要な要素として「エラマ」を取り上げたい。

「エラマ」は人生という訳が当てはめられることが多いが、その意味は文脈によって異なり、より幅広い意味を持っているため、日本語一語にその訳を取めることは難しい。「エラマ」は「生きる」を意味するフィンランド語の動詞“elää”から作られた名詞であり、フィンランドの書き言葉では16世紀半ばのウプサラの祈祷書と新約聖書を翻訳したアグリコラの時代から現れた(Häkkinen 1987: 116)。“*Vanhan kirjasuomen sanakirja* (『古フィンランド語辞典』)”によると、「エラマ」は1) 生きているもの、2) 生き方、人生、生命、活力の源、3) 人間内部の生、精神的な命、永遠の命という説明がなされている。また、フィンランド語辞書“*Kielitoimiston sanakirja* (『現代フィンランド語辞典』)”によると、1) 生きること、生物学的・精神的現象としての身体の機能、生きている状態、生活、2) 個人(人)の生きる時間、生きている状態の全体、人生の諸段階、3) 個人が生きる様々な側面、人生の質、生き方、4) 人が生きる間の全ての現象、人の周りの現実とそのすべて、5) コミュニティーの活動の様々な側面、感情、事情、状況、6) 活気、意気揚々とした行動とある。また、幡野恒の『フィンランド語日本語辞典』によると、「エラマ」は1) 生命、命、2) 人生、生涯、3) 生活、暮らし、4) 活発さ、騒音を意味する言葉として記されている。このように、幅広い意味を持つ「エラマ」であるが、この言葉は生物学的な生命やそのサイクルを示すものだけではなく、その生き方や人生、生の精神的側面をも含んでいることがわかる。“*Kielitoimiston sanakirja*”の説明においては、「エラマ」の対象は人間としていることが見て取れるが、この言葉は決して人間の生にだけ限定されるものではない。「木も人間も野菜も鳥も同じように生まれて死ぬ。それがエラマだから。」といったイーリスの言葉からわかるように、動物や植物にも当てはめられるものである。

フィールドにおいて、樹木と人間は、どちらにも「エラマ」があるという点で繋がっており、対等な存在として捉えられている。カルシッコの木と彼ら自身が同じようだと言われたのは、同じように生命を持つということだけではなく、生きることの中で経験する現象についてでもあった。樹

木は単なる非人間としては捉えられない。家族はカルシッコを尊敬し、その領域を乱さないように努めている。カルシッコの木もまた、尊敬され、立ち枯れとなっても切り倒されず、その場所で生きることができている。釘打たれながらも、その身をもって家族の歴史を体現することで家族と繋がり、思い出を紡ぎ、与えているのである。

しかし、カルシッコの木を通して「エラマ」を考えると忘れてはいけないのは、「エラマ」の多重性である。カルシッコは樹木自身の「エラマ」を示すと同時に、死者たちの「エラマ」をその身で示している。残された家族にとって、死者と過ごした思い出が埋め込まれた景色の中に聳え立つカルシッコは、年に数回しか行かない離れた教会の墓地や故人を思い出すツールとして代表的な写真よりも、より死者の「エラマ」を近くに感じるものであろう。「私は墓場にはほとんど行かないけれど、カルシッコのところには行くわ」といったイーリスの言葉とカルシッコに注がれたまなざしは、そのことを暗に示していた。人々はカルシッコを見ることで、自分の「エラマ」とカルシッコの「エラマ」、死者の「エラマ」を重ね合わせては、故人や昔の生活を思い出している。これがカルシッコの風習を通して見えた、樹木と人間がともに生きる姿であった。

5. 終わりに

本論文では、フィンランドの宗教的文化的背景を踏まえ、死者のカルシッコの歴史と現状を先行研究とフィールドワークの情報をもとに記述し、カルシッコの木と人々の関係についてアプローチした。カルシッコを通して垣間見えたのは、樹木の主体性である。カルシッコの木は単なるモノとしては扱われず、それ自身が生きている存在であり、死者やかつての風景を思い出させることから、人々に影響を与えていることが窺えた。それに対して、家族もカルシッコと死者に敬意を払い、カルシッコの領域を乱さないよう努めるのであった。カルシッコの現地における文脈において、樹木と人間は、人間が自然に対して一方的に影響を与えるというような構図ではなく、互いに影響を与え、受けとる関係にあることがわかった。加えて、本論文では樹木と人間の影響関係を支えるものとして、「エラマ」という言葉を提示した。「エラマ」はその文脈ごとに人生やいのち、生活など、様々な解釈ができる言葉であり、人間だけではなく、動植物にも当てはめられる言葉である。生まれて、家族や仲間ができて、人や動植物を世話して、世話されて、死んでいく。樹木と人間は本性上異なっているが、「エラマ」という点においては対応しているのであった。

ではこの「エラマ」の相互関係はどのような基盤によって成り立っているのだろうか。今後は今回提示した「エラマ」に関する人々の語りを、人々の生活での振る舞いやカルシッコを含めた動植物や他の人々との関わりに結び付けて考えていきたい。そのことを通して、彼らにとって「エラマ」がどのようなものか、具体的に理解することができるだろう。

参考文献

カービー、デイヴィッド

2008『フィンランドの歴史』百瀬宏、石野裕子監訳、東眞理子、小林洋子、西川美樹訳、明石書店。

グレーヴィチ、アローン・Ya

1996『同時代人の見た中世ヨーロッパ』中沢敦夫訳、平凡社。

コヴァライネン、リトヴァ&セツポ、サンニ

2009『フィンランド・森の精霊と旅をする』柴田昌平訳、プロダクション・エイシア。

田中佑実

2020 「カルシッコの風習—フィンランドの樹木と共に生きる世界—」『北海道民族学』16: 58-73。

幡野 恒

2014 『フィンランド語日本語辞書 第4版』。

ハルヴァ、U.

1991 『シャマニズム』田中克彦訳、三省堂。

外国語文献

Holmberg, Uno

1924 Suomalaisten karsikoista. *Kalevalaseuran vuosikirja* 4: 7-82.

Hornborg, K.H.

1886 Karsikoista. *Virittäjä* II: 93-97.

Häkkinen, Kaisa

2013 *Nykysuomen etymologinen sanakirja*. Helsinki: Sanoma Pro.

Kemppinen, Iivar

1967 *Haudantakainen elämä: karjalaisen muinaisuskon ja vertailevan uskontotieteen valossa*. Helsinki: Karjalan tutkimusseura.

Kovalainen, Ritva & Seppo, Sanni

2014 *PUIDEN KANSA*. Porvoo: Hiilinielu tuotanto and Miellotar.

Krohn, Kaarle

1898 A kind of worship of the dead in Finland. *The International Folk-Lore Congress of the World's Columbian Exposition* 1: 64-69.

Krohn, Julius

1894 *Suomen suvun pakanallinen jumalanpalvelus: neljä lukua Suomen suvun pakanallista jumaluusoppia*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

Lavery, Jason

2017 Mikael Agricola: Father of the Finnish Language, Builder of the Swedish State, in *Lived Religion and the Long Reformation in Northern Europe c. 1300-1700*. Katajala-Peltomaa, Sari&Toivo, Raisa Maria eds., Cambridge University Press. 205-229.

Pentikäinen, Juha

1990 *Suomalaisen lähtö: kirjoituksia pohjoisesta kuolemankulttuurista*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

Purmonen, Veikko

1981 *Orthodoxy in Finland Past and Present*. Kuopio: Orthodox Clergy Association.

Sarmela, Matti

2009 *FINNISH FOLKLORE ATLAS Ethnic Culture of Finland 2*. Silver, Annira trans., Helsinki. <https://www.sarmela.net/folklore-atlas/>

Vahtola, Jouko

1980 *Torniojoki-ja Kemijokilaakson asutuksen synty: nimistötieteellinen ja historiallinen*

tutkimus. Rovaniemi: Pohjois-Suomen historiallinen yhdistys.

Vilkuna, Janne

1992 Suomalaiset vainajien karsikot ja ristipuut. *Kansatieteellinen arkisto* 39, Helsinki: Suomen muinaismuistoyhdistys.

1993 The karsikko and cross tree tradition of Finland: the origins, change and end of the custom. *Ethnologia Europaea* 23(2): 135-152.

Vuorela, Toivo

1979 *Kansanperinteen sanakirja*. Porvoo: Werner Söderström Osakeyhtiö.

Waronen, Matti

1898 *Vainajanpalvelus muinaisilla suomalaisilla*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

オンライン辞書

Kielitoimiston sanakirja (現代フィンランド語辞典)

<https://www.kielitoimistonsanakirja.fi/#/> (2021年6月23日閲覧)

Vanhan kirjasuomen sanakirja (古フィンランド語辞典)

<https://kaino.kotus.fi/vks/> (2021年6月23日閲覧)

The *Vainajan karsikko* of Finland: the formation, change, present of the custom

Yumi TANAKA

(Graduate School of Letters, Hokkaido University)

A *Vainajan karsikko* is a tree selected to commemorate the deceased, a custom once known in the Savo area of Finland. The tree was chosen from trees along roads to a cemetery. It was marked by cutting branches or carving initials of the deceased and numbers on a trunk. Those trees functioned to prevent the return of the deceased from Lutheran Savo people's cemeteries in the 17th century. The *karsikko* protected people's life styles and garnered their respect and fear. However, modernization changed how people recognized the *karsikko* in the 19th century.

Prior research has focused on *karsikko*'s form, function, distribution, and relations with Europe and the Baltic area. Research on the *karsikko* continued uninterrupted from the 1880s and into the 1990s and has mainly focused on its origin and functions, as well as its relations between the deceased and the living. However, in my fieldwork conducted since 2018, talk about *karsikko* is often not about the commemorated deceased, but instead about the tree and the living locutors themselves."

In this article, first I introduce the Finnish religious and cultural background as the foundation of recognizing the *karsikko*, and I describe the formations and changes of the *karsikko* based on previous research. Then, I indicate its present situation with information from my fieldwork and approach the relationships between the *karsikko* and its family, focusing on the word *elämä*.

